

宗教学

Religious Studies

シリーズ責任者：宗教学 特任教授 小 田 武 彦

1. 学習内容

聖マリアンナ医科大学が創立されたのは、「キリスト教的人類愛に根ざした『生命の尊厳』を基調とする医師としての使命感を自覚し、人類社会に奉仕し得る人間の育成、ならびに専門的研究を人類の福祉に活かしていく医師の養成」（建学の精神）のためです。本シリーズでは、具体的なさまざまな事例を題材にして、諸宗教、特にキリスト教が大切にする「生命の尊厳」とはどのような意味内容をもっているのかを学んでいきます。また、さまざまな事例に遭遇したときに何をどのようにしたらよいかについて考察し、責任をもって自律的な判断をくだすための訓練をしていきます。

2. 到達目標

- 1) 医療者が直面する具体的事例に即して、生物学的な「生命」、一人ひとりのかけがえない「人生」、家庭「生活」、そしてそれらを取り巻く社会「生活」が、どのような意味で深く結ばれ、なぜそれらを切り離してしまっはいけないのかを説明できるようになる。
- 2) 医療者が直面する具体的事例に即して、どのようにすれば生命を粗末にせず、生命を尊重するにはどのような配慮が必要かを説明できるようになる。

3. 学習上の注意点

- 1) 講義最初の 5 分間と講義最後の 10 分を Reaction Paper 記入の時間とします。最初の 5 分間では前回配布された「準備資料」の要約を、最後の 10 分間では講義から学んだことや講義をきっかけに気づいたことを Reaction Paper に記入してください。
- 2) 講義中、分からないことや確認したいことがあれば、遠慮せずに挙手をして質問してください。
- 3) 学習上の相談等のために、遠慮なく教育棟 3 階の教員室を訪ねてください。

4. 教科書・参考書

教科書：なし。

参考書：

(1) 『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』(日本聖書協会) 1988

(書評) プロテスタント教会諸教派とカトリック教会との聖書学者が協力して、ヘブライ語原典から訳した「旧約聖書」とギリシア語原典から訳した「旧約聖書続編」、そしてギリシア語原典から訳した「新約聖書」を一冊にまとめたもの。本学「宗教学」全体の基調となる文献のひとつ。

(2) 教皇ヨハネ・パウロ二世、『回勅 いのちの福音』(カトリック中央協議会) 1996

(書評) カトリック教会の最高指導者(教皇)が、いのちの尊さの根拠を説き明かし、現代の諸問題に対する見解を示した書。本学「宗教学」全体の基調となる文献のひとつ。

(3) 日本カトリック司教団、『いのちへのまなざし ― 二十一世紀への司教団メッセージ(増補新版)』(カトリック中央協議会) 2017

(書評) 日本のカトリック教会指導者(司教)たちが、生命にかかわる諸問題を取り上げ、日本で生きているすべての人に向けて送った「いのちと人生についてのメッセージ」。2001年に発行された初版の根本姿勢を踏襲しつつ、新たな統計データ等に基づいてほぼ全面的に書き改められた。本学「宗教学」全体の基調となる文献のひとつ。

(4) 日本カトリック司教協議会 社会司教委員会(編)、『なぜ教会は社会問題にかかわるのか Q & A』(カトリック中央協議会) 2012

(書評) キリスト者には、キリストの生き方を基本とし、その福音を人々に伝えることによって人々と社会が内面から変えられるように働きかける使命がある。本書は、教会が社会問題にかかわる根本的な理由を説明した書。本学「宗教学」全体の基調となる文献のひとつ。

(5) 井上洋治、『キリスト教がよくわかる本』(PHP 研究所) 1991

(書評) Q & A形式でキリスト教を紹介する入門書。講義「聖書の生命観」の参考文献。

(6) 日本カトリック司教協議会『今こそ原発の廃止を』編纂委員会(編)、『今こそ原発の廃止を ― 日本のカトリック教会の問いかけ』(カトリック中央協議会) 2016

(書評) イエス・キリストから「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13・34) と呼びかけられた日本のカトリック教会が、未来世代をも含めたすべてのいのちと尊厳を守るために、福音的・倫理的な観点から原発問題を考えるための材料として編纂したもの。講義「いのちの未来」の参考文献。

(7) 本橋成一、『うちは精肉店』(農山漁村文化協会) 2013

(書評) スーパーマーケットの「切り身」からは牛や豚の姿を想像することが困難だ。北出精肉店が黒毛和牛の子牛を二年間育てた上で精肉していく様子を撮影した写真集。講義「食べることと生きること」の参考文献。

(8) 中村桂子、『ゲノムに書いてないこと』（青土社）2014

（書評）「私たちは生きものであり、自然の一部であるというあたりまえのことを基本に置き、あらゆる事を『いのちにとってよいことでしょうか』という判断基準で」問いかける書。講義「物差しを求める」の参考文献。

(9) 中村桂子、山岸敦、『「生きている」を見つめる医療 ― ゲノムでよみとく生命誌講座』（講談社）2007

（書評）「今を生きる全ての人にとっての医療のあり方を考え、『私が生きているとはどういうことか』という『私』を知るための基本を考える」ための書。大阪医科大学「医学概論」教科書。講義「いのちを迎え入れるための配慮」の参考文献。

(10) 柳澤桂子、『いのちのはじまりと終わりに』（草思社）、2001

（書評）生命学者である著者が、自身の「つわり」や出産の体験紹介から始めて、安楽死や終末期医療に至るまで、現代の医療について一緒に考えようと問いかける書。講義「受精卵から胎児への歩み」の参考文献。

(11) シモーナ・スパラコ、『誰も知らないわたしたちのこと』（紀伊國屋書店）2013

（書評）出生前診断によって、生殖補助技術で授かった息子に重大な疾患があることを知った母親が、人工妊娠中絶するまでの「魂の彷徨」を記した書。講義「生殖補助技術」の参考文献。

(12) 医療法人聖粒会 慈恵病院（編著）、『「こうのとりのゆりかご」は問いかける ― 子どもたちの幸せのために』（熊本日日新聞社）2013

（書評）慈恵病院が「様々な事情で親が養育できない新生児を匿名で受け入れる『こうのとりのゆりかご』の運用」を始めてから6年が経過した段階で、日本の現状がどのように変わってきているかを浮き彫りにした書。講義「子どもを守る取り組み」の参考文献。

(13) 蓮田太二、柏木恭典、『名前のない母子をみつめて ― 日本のこうのとりのゆりかごドイツの赤ちゃんポスト』（北大路書房）2016

（書評）「誰にも相談できず、誰にも知られず、社会の片隅に取り残された妊婦と胎児」に向き合うことについて、じっくりと考えるための書。講義「子どもを守る取り組み」の参考文献。

(14) 教皇庁 教理省、『生命のはじまりに関する教書』（カトリック中央協議会）1996

（書評）カトリック教会の教義に関する問題を扱う任務を持つ教皇庁教理省が、「生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えた」書。講義「子どもを守る取り組み」の参考文献。

(15) 日本カトリック司教団、『生命、神のたまもの』（カトリック中央協議会）1984

（書評）日本のカトリック教会指導者（司教）たちが、「科学技術のもつすばらしい可能性と恐るべき危険性」を浮き彫りにしつつ、生命を尊重しようと訴えた提言。講義「子どもを守る取り組み」の参考文献。

(16) 中山愈、『社会福祉原論－人間福祉と生命倫理の統合を哲学する』（弘文堂）2005

（書評）人間福祉と生命倫理が深く関連し、両者の間に横たわっているさまざまな共通課題を問題にしつつ、社会福祉の根本理論を検討した書。講義「医療と福祉のかかわり」の参考文献。

(17) ピーター・ピオット、『NO TIME TO LOSE－エボラとエイズと国際政治』（慶應義塾大学出版会）2015

（書評）UNAIDS（国連合同エイズ計画）の初代事務局長を務めた著者の「エボラ」や「エイズ」等の感染症との出会いと闘いの記録。講義「医療と社会 AIDS 運動に学ぶ」の参考文献。

(18) 教皇フランシスコ、『回勅 ラウダート・シ－とともに暮らす家を大切に』（カトリック中央協議会）2016

（書評）「大気、海洋、河川、土壌の汚染、生物多様性の喪失、森林破壊、温暖化、砂漠化、山積された廃棄物…」人間の活動が他者と全生物とに与える影響に関して、連帯と正義の観点から取り組むことを呼びかける書。講義「ともに暮らす家を大切に」の参考文献。

(19) 櫛島次郎、出河雅彦、『移植医療』（岩波書店）2014

（書評）死因究明制度が未整備な中で行われた臓器移植法の改正（2009 年）が抱えている問題点と再生医療の課題を整理した書。講義「生体臓器移植」と「脳死と臓器移植」の参考文献。

(20) 伊藤華、『ゆうやと一緒に歩く道－「脳死」から 4 年、我が子とともに過ごした日々』（木星舎）2014

（書評）小学 4 年生の息子が自転車で転び脳内出血（急性硬膜外血腫）。自発呼吸が停止し意識不明になってから心臓死するまでの 3 年 11 か月間の記録。講義「脳死と臓器移植」の参考文献。

(21) 櫛島次郎、『生命の研究はどこまで自由か－科学者との対話から』（岩波書店）2010

（書評）日本における「いまのお仕着せの倫理…」を乗り越えて、科学研究本来の性質に見合った…生命科学の『仁義』を打ち立てる」ことを願って、宇宙物理学、行動生態学、分子生物学、発生工学の専門家と対談した記録。講義「再生医療」の参考文献。

(22) 櫛島次郎、『生命科学の欲望と倫理 ― 科学と社会の関係を問いなおす』(青土社)2015
(書評) 生命科学の研究倫理と生命倫理の筋論を整理した上で、「応用問題として、再生医学や、人工生命(合成生物学)といった新興の研究分野の動向」を考察した書。講義「再生医療」の参考文献。

(23) 佐藤健、『ホスピスという希望 ― 緩和ケアでがんと共に生きる』(新潮社) 2014
(書評) 国立病院機構豊橋医療センター緩和ケア部長の著者が「緩和ケアを分かりやすく解説したガイドブック」。講義「CARE 中心の医療を目指す」の参考文献。

(24) 長島正、長島世津子(編著)、『最後の授業 ― 愛とケアの人間学』(丸善プラネット) 2011
(書評) 長島正が死の直前まで続けた上智大学社会人講座「ケアの思想」の講義をテープに起こしてレジュメとともに編集した書。講義「CARE 中心の医療を目指す」の参考文献。

(25) 山下弘子、『雨上がりに咲く向日葵のように ― 「余命半年」宣告の先を生きるということ』(宝島社) 2014
(書評) 肝臓がんによって「余命半年」と宣告された著者が、手術、再発・転移、抗がん剤の副作用等を経験しつつ、余命宣告後約2年間の本音を記した書。講義「自分らしい最期を迎えるため」の参考文献。

(26) 小松奈美子、『医療倫理の扉 ― 生と死をめぐる』(北樹出版) 2005
(書評) 「現実に悩み苦しむ患者の立場からターミナル・ケア、がん告知、安楽死、臓器移植」などについて考えさせる書。講義「自分らしい最期を迎えるため」の参考文献。

(27) 宮本顕二、宮本礼子、『欧米に寝たきり老人はいない ― 自分で決める人生最後の医療』(中央公論新社) 2015
(書評) 「国民一人ひとりが、自分はどのように生きて、どのように死を迎えたいのか」を考えるきっかけになるようにと問題提起した書。講義「死を迎え入れるための配慮」の参考文献。

(28) 柳沢桂子、『われわれはなぜ死ぬのか ― 死の生命科学』(草思社) 1997
(書評) 「これまでだれも語ることのなかった死の進化をたどり、われわれはなぜ死ぬのか」を考えた書。講義「死」の参考文献。

(29) E・キューブラー・ロス、『続 死ぬ瞬間 ― 死、それは成長の最終段階(完全新訳改訂版)』(読売新聞東京本社)、1999
(書評) 死とその過程について広範囲にわたって集めたさまざまな見解から、「死にゆく人々は何を求めるか」を考察した書。講義「死」の参考文献。

(30) 島菌進、竹内整一（編）、『死生学 1 - 死生学とは何か』（東京大学出版会）2008
（書評）東京大学の大学院人文社会系研究科が医学部・教育学部などと協力して 2002 年より取り組んでいるプロジェクトから生み出されたシリーズの一つ。講義「死後のいのち」の参考文献。

(31) アルフォンス・デーケン、中村友太郎（編）、『未来の人間学』（春秋社）、1999
（書評）「生きがい、死にまざる命、日本人の宗教心の特色など、多彩な論考」を集めた書。講義「死後のいのち」の参考文献。

(32) 清水哲郎（監修）、岡部健、竹之内裕文（編）、『どう生き どう死ぬか - 現場から考える死生学』（弓箭書院）2009
（書評）在宅ホスピス・在宅緩和の現場を共有し、生と死の現場に身をおきながら新たな死生学の構築に務めている研究者たちの共同作品。講義「死後のいのち」の参考文献。

5. 成績評価

評価項目	実施回数	評価割合	備考
Reaction Paper	24	100（％）	提出状況、記述内容、授業態度等の総合的評価

6. オフィスアワー

所属	役職	氏名	時間	場所	連絡先
宗教学	特任教授	小田 武彦	在室中いつでも可	教育棟 3 階 宗教学教員室	toda

メールアドレスは @marianna-u.ac.jp が省略されている。